里見八犬傳 第六輯 巻六

13
341
31

弘化二年十月吉日 求之
松野勝兵院

南總里見八犬傳第六輯巻之五下冊

東都　曲亭主人編次

第六十回　胎内竇ゑ現八妖怪を射る
　　申山の窟に冤鬼髑髏を託ぬ

登時犬飼現八ら鵐平が長物くりを掌果て嗟嘆ふ堪む。現世の人のさゐく
ゐ得ぬ孝子ぞ。ちかぢかまこと不慈の親もありけり。ちるもあるこの子の賢ゐる。直ち
心ふ呉竹の世を形きくもひ捨てゐ菩提の道ふ入らんと。ゐるゐんと惜むべゐるふゐんべき
退らんと。臂近ふ笠引よせ。哺翁庚申山の奇異怪談。赤岩大村親子のうく
さゐと詳ふ告られて日数累ー旅宿の憂苦を忘るくまそゐ慰めくりなくゐの地ふ
来ゐる甲斐よゆる夫山の壤を踏ゐ後々まで話柄ふるゐ死ゐのヨくゐれど此度ち
きゐく人を索ゐ心急ぎのせゐるれゐそゐ又久さのゐるふせんゐ。ゐぐれ彼山の麓路を過ゐ

ずハいかにして汝が志をも達するべき。かれハ意見に隨ひて弓箭を買ひてゆくべき
のみ和主が好と思ふを取出して見せよといはれて女は身を起せば鵙平ハ微笑
ながら見せて外面瞻望て彼商せ日影ハ斂て彼處の櫺を外れたり。晡時に程もあら
らんに今より急ぐとも神子内村で日ハ暮なん。いまだそも彼村に客店はなけれど。
今宵ハ柱に宿りて宿に曉しぬべしと勸めても。いまはあらハ思へどもけふぞも宿錢の欲ければ
隨に此も免れず物たりしげに權し徽して旅せし人の足を禁めてするとおもはれもせば
痛まぬ肚を摩するに似て朽惜気なる弓箭ハ我身の意に稱ふをみづから擇ません
才と忘て躬て左右の手に撥攫みて出して弓箭を現八にこれ彼と擇て取る
ほうとやよく遞与せば鵙平ハその侭柱に推當て。弦引かけて両條の獵箭
共侶さしあはするその間に現八ハ腰に著たる錢解出して弓箭の價を取らせつ。
なほ道中とるる程に鵙平いふ身叮嚀に客人路次に由斷すな彼神子内までち

過ぎて山巓村なる急ぐべき是首よりして山巓まで大約二里半道なれども。
山がしあれば四里にも敵へり倘この風が北に吹らば雨にならんも測りかたからぬ
ものと諄くも田舎氣質の實意ある人の辭に現八ハ歡びを演別を告て身
をよく結ぶ笠の紉撥取る獵箭を背のうへ帶にそが侭挿めども後へに引返手
東ねる小脇に挟と攜て寢くも麓路と足に信して急ぎけり却說犬飼現八は。
今此路を貪りて頻りに進みて身の危きをかへりみざるにあらねども茶店のある
しが言寄問話ハ只世渡りの方便のみ土俗の言ハ特むに足らずと行銷しくる
處なく今宵の宿りを投んにさのみ難かることやあると侮りしより道者を傭ひで只
かの弓箭を攜て登る山路ハ二里あまり神子内村を稍うち過て嶺を投してく
急げども頃ハ九月初旬日影短くなりて黄昏て天さへ曇る山ふところの。
ゆくても闇き樹下蔭に前路もみえざるなりしかハさかる有繋に安からぬ肚裏に

必よ安うかるべしと知るぎしと烏夜ゐ要るを弓箭より買えべるめい松明より
しと噫悔しくも脱落ゐけり任他神子内より巓村へ路程一里半道あり
とゑ雪と既ゐと神子内より二十餘町もまろんゐあより進むも退くも路ゐ
損益ゐる感べ讐者も京へ登るとの世の常言ゐるめを暗死ゐ怕るとろへ
と志を奬しと其処とも知る由嶮を辿るも果しるぎ夜の深ゐ程ゐと辛
しく雖遇々々人ゐ遇えば西狄東狄問よりまくて迷ひ入ると幾町なりけん
澤邊彷ひよ登ると二三里ゐんと思べども麓村へ至るまくく牡鹿の声のを
聞えけりのれが里ゐ遠ろいふを思ひ且疑ひ且怕めば心ゐ定まら
ずゐ夫ゐ後悔臍を噬すぐゐ又法ぐと思べやう不知案内の深山路を如法
闇夜ゐ辿んより為ゆく暗るを俟べ狄否々ゐ苗ゐとも猛獸毒蛇の
患ひを禦ぐよりゐるもゐ只命運を天ゐ儘しく夜暁し走べ何処

まれ里ゐも到らん人ゐも逢んゐとそゐ思ひ上ゐ下ゐ又幾十町狄ゆく程に思ひ
ゐ行るく最大なる石門の間よりゐ来りけり之ゐ天ゐ稍霽く没遊りくゐ七日の
月ゐ山陝ゐ入る間幽るる影を便著ゐ晴を定めく且彼此を考へるゐ嚮ゐ足緒の
鵙平が説示ぜし也それと思ふ庚申山まありとゐ胎内寶ゐ似るりけりゐ什麼生
とぞりゐ且敬鳥なる且呆れて忙然しとして立在しを思ふらくく又ゐ思ふとそゐて
山深く迷ひ入りしを又今ゐりゐ巓村まぐ至らんと輙なる路ゐ求めざれば今宵を
且この宵なる暁しく里へ下るべしと尋思をしつ坐しと占く弓箭を側ゐ引つけく
ゐ深る夜を成くとれば月ゐ忽地没果く蛬び鳥夜ゐ哭ゐ現幽谷の峻
岨るるこの四邊ゐ鹿もゐるぎ山氣頻りゐ肌膚を犯しく夜寒ゐ里ゐ弥増う
熟ゐ山路ゐ夜を辿めく迷ひゐるしとれば身ゐ心も疲労果くしし形や
路を貪るぎゐ苦ゐ艱苦ゐ辛らすを途言を察せぎ田舍翁とゐ侮りて

実意ある人の諫を聽ざりしより千金の身を危くせるの愚魯なりと亦はるかに後悔の外他事もなく寢られぬ隨に友の身養父母の身親の身在とうき世の過去ることを思ひ續けて曉る天をいとく遲しと俟ほどかの鐘の音はれ渡ども星の光を仰く瞻るまに丑三の刻と思へ比東のかたより忽然と螢火可の火光閃々とかく西二点ばかりを投ける如くいとも幽なるえーゐ現八ふく怪こゝく彼の鬼火狹きらぬの天狗火のやうなるえーんむーえ要ことのれと遽しく半弓拿まく胎内竇を出く傍の樹蔭を指柴まるつく顧ひをりける程に件の火の近つく隨の大なるるるく。そのあるりを燭せるを炬に異ならぬ既わしとその間四五反ばかりのるるまでよ。現八ゝ目よく見とく瞬もせずありけるの怪しむべしその火の光の地狗天狗の所為のわるく。えもえられぬ妖怪の両眼の耀きるゝ且その模様を譬ていへば面の暴くる虎の如く。口ゝ左右の耳まで裂く。鮮血を盛る盆より赤く又その牙の真白のーく。

剣を倒の裁ける如く幾千根の長き髯の雪に閃く柳の糸の風に乱れて戰ぐに似たりあれども形體の宛人に異るる腰の両口の大刀を横佩て駿駒に跨るるその馬も亦異形ゆゑ全身まだく枯木の如く処々に苔生て四足の樹枝るべくその尾の芒の生るえ左右の後に若黨あり一箇のその面藍より青く一箇のその面の赤く更る諸天の彷彿たるかくてこの妖怪主従徐々に馬を歩せて何ぞ相譚々々或の高く笑ひてーく。胎内竇のくるまよけり現八ゝ彼為体を見定めるるくに些も驚ぐ氣色なく心の中に思へう彼馬に騎るるゝ妖王なるべれ先にまれば物を征ー。後るゝとゝの征せるる彼奴をゝ射く落さんその餘の必逃亡るんとやゝ怨を復さんとくとれ彼齊一うち逆ふともの怕るるに足るるれるるとと早速の尋思ハ勇士の大膽両條の前の腰にあり半弓左に突立く霸に件の樹に攀本

登るとその神速なる猿猴の如く程よき枝に足踏留めて弓に箭刺つがへ弯固めつ。雲妄時矢比を張ひろ引けれども妖怪ホハ。ひくとみるひらひらうん。心のどけくうち相譚て胎内竇に近きろ進え入んとする程に寇濟せ現八が矢声も猛く疾つ箭に件の騎馬なる妖怪ハ尤の眼を筈比深に射られて。一声苦と叫びもめぞ馬より墜と墮るを吐嗟と騒ぐ両箇の妖物も屑のるを取り肩に引ぶ一箇ハ馬を牽つも舊来しく逃亡けり。あるに至りて野干王の又黒死夜とるるものから。現八もそ思ひ。一箭に三箇の妖怪を射殺たりけるが。先樹の下に立て。のこそ思念を凝らせる。彼妖物ホハ不意戎撃れて怕れ惑ふて逃れども。ろが半弓ハ圓竹わく。箭も亦真物を殺勢ひ鋭く力弱りのれが眼にあるぞ。と。捷を取るこ難るべ。と思ひ。矢坪の違ねど。ホハも老る妖怪なの一箭あて脆くも死んや或ハ眷屬同類を駈催

ちこ。ぬこび来ぶ。その四ハ防ぐ難うぬべ。地方を易く彼奴ぶ。尾せんもうこそ。そとよけれと思ひよけれ。ぶ。ハ特む弓に一箭を推乃て胎内竇を西のくこ。ぬきぶ拔て又ア。ぶれが亟山異境の奇特るるぬ沒る月の生るまあるねど今海ぐ黒白を別ぶ。ぶ。星光ハ恒ぬもちく。朧夜よりも明りけれ。進退大く便りを海く。只管ホ棒登りてれが彼鵯平ぶらるる違ぬぶ基石あり又舞龍の難所あり。二間餘の石橋裏見の瀑布。庚申の文字石第二の石門燈籠龍石洪鐘石を遥ぬうち見く。十三間る石橋を自若とく渡りけり。信るる形現八ぶ拳法捕物に妙を海く。旦樹ホ登り嶮岨を渉るホ坦地をくろ易るるぬ。初滸我ホ在りとた芳流閣の屋上ぬく。犬塚信乃と組撃する働を。のそ知られり。然れぶそれ今宵も亦深山の樹上に登居く。妖怪を射く拳文系れぶ。袷とのひ。恰とのひ。十三間る細谷橋を足下暗に夜深に渡りて。

亦怕れる氣色なれば人の及ぶ所にあらねども猶夜視ゐて遠景の定り難きを憾とするのみ既ゐ〳〵石橋を渡り果て又攀登れば前路ゐ岩窟數个所あり上古穴居の迹ゐやあらんとのひつゝを現あらるべ〳〵ぶ如くこの外にも奥院すぎ遠くもあらじとおぼゆる又四五程ゐ就中巨大なる岩窟の中ゐ入りて火を焼きぞわりける有ゐ至りて現八は心ともなく両三歩逡巡とせるまぞよりも驚かれ且怪しき原来あるゐも妖怪ゐ漫ゐ地方を更んとて深入せる悔ゆゑ思へば騒ぐ胸を鎮めく絶ゐ残る一條の箭を抜出し弓弯固めくゐのせ立ゝと身構へ登時件の岩窟よりいと細ゆしき声を立て勇士うれ怪しゐひれ吾倚いまゐ妖怪ゐら和殿ハ今霄もとりあく胎内寶のほとりゐそうぶ雙言をうん射ゐひるゐその狡びをいかんとせく候と既ゐ久しゐ猶相譚て頼むゐ〳〵もあまぞ立よりく且火ゐあらゐゐやとゐ呼けられく現八は此も擬議せぬ人のうぞら肚裏ゐ思ふやう。

彼奴が甘言をゐそ。誰引寄せんと欲せるとも。ものぞりのエゐ出る且試く時宜ゐ依る。彼をめゝめと尋思をゝ勇氣を示せ声高ゐ浮世ゐ遠ゐ深山幽谷人の住ぬ所ゐ和主ハ妖怪ゐぞとの狡ゐ赤ゐ何者ぞと詰問ゐ立對へ彼人答てゐれぐゐ某年来ゐる住ゐうぶ見も知ぬゐれども一朝ゐハ説盡しがゐ。枉て且く立よりゐとゐ現八ゐゐゐ疑ひの釋ねども推辞へ怯しゐゐとゐ出ん。そうをゐ〳〵ゐと領ゐく弓箭投捨岩窟ゐ進ゐ入ゐく件の男の用ゐゐゐ遽しく追ゐ揮て推禁め勇士をゐ半ゐ和殿の懐ゐ瑞王ゐ某悍るゐ〳〵ゐれば只顧ゐ相觸ゐゐを欲せぬ目今もゐる如く和殿ハ雙言ゐ傷けゐぶ憤を洩しゐ〳〵ゐハ實ゐ得ゐゐ實ゐれども欵待進もる物もゐ〳〵ゐ解く火ゐゐゐゐの夜寒を凌ぐゐ足ゐゐのゐとゐひゐ蒼柴折焼く傍ゐゐける椎實をゐゐく饑ゐ充るゐゐ現八ゐ火光ゐ就て件の男をつく

○東京堂蔵

妖怪を射て現ハ
寃鬼よ
逢へ
犬飼現八

ゑるふ齢いこ十あまりまゝ形體骨立顔色蒼然縹緲る仁田山紬の亀甲
形の服章染るが幾月日を歴りけん海松の如くに搔垂れ小袖ひとつを被
きけるその為体何とやらこの世の人とおもられぬ護身嚢を王に怕るといひ
しを思へば陰鬼ゑるかもしれ狐狐貉狐狐問試ぶに知るよしもなく思へば膝を推進めて
和主の衢ふるに射る妖怪を雙言とのり渠が何ホの妖物ぞと和主が亦甚麼るる
のれぞとこゝろ中に示さまやとせるに向れて件の男が嘆息して額を拊て話るも
苦しく過去くを僂數れば十七年いと長くして言るを心静に聞き和殿が
射て落しける妖怪はこの高峰る胎内竇の邉に棲りし野猫の化るべし渠既に
幾百歳の旦生霜を歴る隨ふ大なるを以て猛きこと虎に似り神通自由
なるをもてこの処の山神土地を奴僕の如く役使ひぞとのゝとるしかども木精年老
獣貂貂などの類まで相従ふを渠は媚今宵彼奴が乗る馬は是千載の

木精ゆゑ老樹の精の化るを又彼両箇の後者とんえーは所云山神と土地とさるを
より野猫が射られく馬より隊を落るとり仇を索る意るく慌忙に野猫を肩に
うけて逃亡さりぬ件の両神神通渠に敵しがたく年来使役せられ
ども真實帰伏せしめられるを肩ふるを幸にして資けく宿所に還れる
のみにあらず貂と貂るを必和殿を索求めく処を復さんとて謀らはるを
そのゆゑをもて亦是和殿の洪福又某を陽人るを告るも面ぶ形ふこと
るをこの深山より程遠くぬ赤岩村の郷士なりける赤岩一角武遠と呼まて
の横死しる冤魂あり留りく假に姿を顕しより某累世武弁の家ゆく
郷士ゆゑなれども武藝に人に讓るとなく鞍馬八流奥義を極めて好くく
人の師となりしより鄙ゆゑわれを弟子ヨメとりかくく寛正五年の初冬某漫に
武藝に自負しく名を顕さんとありしをもく昔よりしく人の怕るこの深山る

奥院をんとさく門人ホを誘引ふ衆皆齊一陌ちく諫るといく説破り高弟僅ふ三四名と役僕とのみ相倶しくえや山ふく陟る程ふ既ホ第二の石橋を渡らんとせ折ふ門人ホハ顔色の蒼くうるまくぐ戦慄く半ふ三三ぐ引ク人ふ。ぬさびく諫めく已ざりしを某些も聴ずして弓杖突さく只一已彼石橋を渡果くこの岩窟のほとりちくぐ頻りホ登る程しもれ陰霾る風颯と旨して倏忽塵埃を吹起れば。倒されぬと岩稜ホ攜る心の迷ふぞ前後もしらむるのこるくぐ砂石ホ眼を撲れく怵ぶくもあらざれば弓投捨つ袖を合して頭を低く眼を掩ふ。由断と覗ホ件の野猫この岩窟より跳出けん某が後方より背ふ凡ちちりと仰さまふ引倒さをあろはうと輾る隨ふ。ふく短刀を抜放く来て蒐ふく猛獣の吭を刺んとしつれども拳狂ふく前足を一刀斫ぐ浅痍ゆく冬所ふ。ねび物ともせず勢籠ぐ某が吭ホ啖著くりける牙ハ鋒より鋭なふ一振られ大事の深痍ホ雷妄時もあらむ。緯断れ死骸を窟ふ引入られく飽まぐ腹を肥されり。かくとハ知らぬ門人ホハ某を待ひびくその曛昏ホ宿所ふ還ぞ云云と報くが妻子の歎ハ大ふ。ふ。ぬれがその次の日ふ里人ふ駈催たる門人送ふくれ立ふ又この山ふ索来れどもの四も長ぬ石橋を渡るれるぐ。ぐ又徒ふ引久ふ折ふ件の野猫ハ某が貌ふ変ぐて某が衣某が大刀行勝ふ身ホ著く胎内窟の遺ホ。既ホ一ふ生ふくゆく衆人を呼びぐめく緯如此々ふ。ホ瞞ふ容貌言語一点違ハ。誰ふ非ずと疑ホ。ぬ衆皆歎び勤ふく扶掖ふく宿所ふ還れば妻子も驚ふく死ふるぬ。甦生地ふ天ふ歎び地ふ喜ホ歎待態ふ浅ふけ抑件の野猫が某ホ化たぐ緯のふを甚麽ふ某ホ後妻ふり窓井ホのぬ廿二歳鄙ホ儔ぬ容止美ふりければ犯さんとその所行ふりけ。憐む後妻窓井ホ変化

不測の妖魔を良人と思ひつ夜毎々々に枕の数も累りく牙二郎と名づける。男子を産されども非類に虐を穢され精液漸々に衰へく三十に足で穿まろ〻ろ見よりして後假一角に妾娶買易く只淫樂を旨とつるその妾ほたいく程もなく或い精氣を吸耗されて一日も歴ぜ死するもあり或い寵の衰へく。竊に啖殺されを逐電せんとのるくもそ中に近属来い所船虫といふ妾い邪智逞しく慾ふく行ひ穢きて淫婦なれば彼同病い相憐に同氣を相称ぶ沿習ふく妖邪に觸れても差なく且妖獣のかろよ悠ひそたや正妻まるりしふ兄の為ゆい継母といふこれも亦恨むべし。もとりこぶ兄角太郎い仙紀より孝友の志疎るらねば彼妖獣を親とあこ思ひ違へく墓べども妖怪を已が子の牙二郎が生れしろより角太郎を憎むと不慈る継父の類ゆめ〻日毎の呵責に嘯くぐ竊に殺しくその宍を啖んと欲せしぐも角太郎を過

世ゆく神明佛陀の護らせるよ身に亦具ら所瑞玉あれば渠ゆふともるところ程よ角太郎が母の兄る犬村儀清。あくその機を察しけん。養んとく宿所に呼取り文学武芸飽まぐ教くその女児をもて妻せり。れより角太郎い養父の家に成長りく犬村氏を肩せも過世の業因ゆゆく名を礼儀とつけれい渠礼讓を宗とて威儀を乱さず名詮自性且瑞玉の字義を取る欲りる児を誉るゆゆ親ゆ大く優りる孝ゆて且仁義に篤く忠信ゆく又悌ゆり礼節智慧も自然に具る世の俊傑とのくども妖邪の為に労して功るく養父母の世を逝りし後彼船虫が奸計もて角太郎を婦のもを赤岩村へ呼久せしこの夏四月の日子るゆ角太郎が妻雛衣い密夫の子を身ともぬとのひ立られて妖と仗の中を列裂れ濡衣もその妻のこゆ〻ぐ〻て角太郎を追出され養父の遺財田園まく推留られてもぐ法

師ゐるんと思ふよりと養家の里人ゐ告ーゐ里人ゐ憐ぶく返壁とゐ地方ゐ
編小る菴を締さく角太郎を容措ゐ且米を贈り銭を遺せく聊恩とせざ
りしゐ大村雛宝守伐清が施ーを好こる慈者の迷徳ゐ報んゐ及角太
郎が孝友の誠心ゐ感じて乞より七角太郎ゐ或ゐ讀経或ゐ坐禅無
言の行を上日とーく世の交を絶のれゐ心ゐ任せぬよーゐくゐまず剃髪せず
るゐ亦神明の擁護ゐよゐもゐ。ゐれども危殃の尋寅縁く雛衣が露
命を保くゐ至らんとの一條より繹破ゐく善悪邪正相顕ゐ玉石真
偽の別れん折ゐ願ゐ和殿ゐ児を助けく怨讐を撃ーゐくーと頼む言
葉の露深く霜とる夜の山風ゐ落るゐ秋の木葉より脆ゐ人の涙ゐり
現八ゐはくぐと呼くゐ胴且塞れて洪歎ゐくゐるーを出ひくん拯れる養と辞
はく小勝を礙と拍て原来御邊ゐけゐ細芦ゐそめくゐの名はゐる赤岩

ぬーゐりけゐよ嚮ゐ彼里ゐる茶店のあるゐが賣弄間話ゐ不憶く御邊の
武男子息の孝友偽ーゐよ違ゐども豈ゐらんゐ一角と名告れるゐゐ真
ゐ獲ゐ今賓胎内寳の邊ゐ某が射く隙ゐる彼妖怪ゐ贋物ゐ赤岩
一角ゐと云ゐ神ゐぞーと誰ゐ知るゐ人ゐゐ御邊ゐ身後ゐ霊ゐゐゐ居ゐ
ゐ赤岩ゐ妻子ゐくゐ怨讐ゐゐくゐ定ゐ知ゐるゐゐゐ妻ゐゐゐゐ子ゐゐ
枕邊ゐ立夢ゐ見せゐ繹如此ゐくと告ぎりけゐと詰れゐ一角頭を掉ぎゐゐゐ
初ゐゐ思ひぎりーゐゐねども角太郎ゐ孝子ゐ妖怪ゐ亦神通ゐれゐ既ゐ貌ゐ変ーゐ
ゐ言語応答常住坐臥武芸ゐ教ゐる刀法ゐぞゐ身ゐ異ゐる所ゐ見ゐ果敢
ゐ夢ゐ実ゐとーく親ゐ疑ゐゐゐ又窓井ゐ如右ゐーゐ目前ゐる良人ゐ非
とーくいゐゐ夢ゐ特ゐ然ゐ人情ゐ思慮ゐ懇ゐ吉ゐゐゐん却妻ゐ子ゐ
疑ひゐ惹ゐゐ彼ゐいゐく危ゐんと思ひまれば黙止ゐれ某が十七年完ゐ

伸るよりもまづ死して朽ざる所以なり大約死しく灵あるのも時至らねば怨を巻
崇をなすも甚難し今幸ひに和殿に遇ぬ和殿いまだ児と過せる夫幽明の
辨難し明の物に由て顕れ幽の人に由て陳べ人物化ぬ幽明分別ぬべし
和殿この理をよくわきまへ児の菴を敲くとも交をのみ厚く結びて且つ言をも
告ぬひて倘徘徊く説示さば児に一切信ずして還て和殿を疑べしはりとく
久しくとゝわるべ。竊に時の至るを俟てその回よりも如此々々と告るべし明の醒んも
見堅要のまゝと諄々と説諭せば現八ちまち領ぬく教諭寔にその理
あり。目今御邊の言葉に就く賢息のうへとなりぬ。神明佛陀彼身を護り且
瑞玉を所持せと受るに養父の姓を月せしより大村とも名告まるべし見大士の
一人ゆくゆくれと異姓の兄弟なれん然ば御邊に頼れぬとも死力を盡し相資げそ
彼妖怪と亡さでらんや見其が願ひとゆりけれども證拠なきに痴人の夢と説くま

似くいと易許へとられやせん。この義いかゝと期を推せば一角も亦領ぬ現その
遠慮なくこれかるべ。其年来秘蔵せる正しき證拠両種あり。その一種の短刀
なりこれ當時某が彼野猫の吭のあたりを刺んとして差く臂を砍る刃なり彼
折ふ妖怪が取遺れたりけるを深く隠しく今に用あり願ひこの児にこの刀をもて
怨讐の胸膈を刺しめ然るこの短刀を角太郎に認めぬとて疑ふ
なわちこの一種を證拠とせこれ見るべし髑髏なり。説くとも解けぬ時に臨て
角太郎が鮮血をもてこれに沃ぐ凝著く親子なると分明なるんその餘の時宜を
依べのまに善に與せる義士と人なく愛顧を憑みなるよくもの人と可嚀に説
示しく岩窟の奥のくさより取出せる髑髏に豫く准備やもけん数冬の葉茂二
三枚重合して包みしを短刀と共に遞与ぬ現八ひとりくに受とるに用よく
なるに短刀に鍔の色もなく。蟲蝕るまゝに鏥さが柄糸はやや朽離て処々に

残る鮫の閉後れる梅花より飲て況てその鞋の斑より剥るる口の乞古墳石稻中の
残剣も共るらねば現八を乞るふ就吱くより就ても懐舊の涙ぞいとど進みける。
アー程より星落て東の山陝ちくみよければ一角外面うち仰ぎく陽人陰鬼道
異るれば久しくあるよ相譚ひろて縱非類より誣られて窮阨その身より逼るともみづ
から愛しき血氣ふ早原短慮の支るるの必今よりの後角太郎と迭より扶け助
られく名を揚家を興しめ給へとく初對面より主のるるどのひ生く果姓の兄
弟るるよりこそ明々地より説示ふ彼妖怪より毒く知れて宿念合期あるさかうん。
彼妖怪ハ神通ありく十里の外のを知るとり。彼奴ハ既より十七年貌を変じ果さ
在れども時とて山林より蓁森しく出ひけん月より必両三度小夜渉る比宿所を出く。
されば深山より歩遊ぶとわり彼奴が和敏より射られハ今宵も遊山よりてあらされば
この山の麓ふ折々人の亡るハ彼畜生の所為ならん素この山ハ神迹あく猛獣

毒蛇あるとあく鰐魅妖怪も棲ぶ彼畜生を憚らぞとりくより来く
遊べるのを彼奴を退治するのあるべ登山の人より患るく。神迹を世ふ伝へ死時
ふ及くより至れるあるを尋ても告く後々の。あらゆるまもあるもわるぶれども
アるる天機を漏さるハ還く神の憎より逼らん今ハ未だ見まぐ。あるれば後
日ふ至りく出ひ合せん為より拙きその口遊より餞別ふせん皆更とのより現八貌を
歛めく。ひさのく高論明教より丹田より受納て忘るるとあるべ願ふを識語と
示ふ。と乞れて一角うち微笑より某武藝を上昔とく文里学より疎れども人死
しく火とるるとれハ世ふ在一日より憂とのあり。萬理より通ぜざるとあるいそくとのひろけて
声朗より誦するを学けば。相遭講武相別誘仇越全露玉菊花
謝秋再阨不釋更向髑髏妖邪亡處申山応遊八
犬具足八犬未周窮達有命離合勿謀南總雖遠終

歸一流。吟ずること三遍にして現八記憶しつければ一角に謝し別を告て。件の髑髏を短刀と共に行袱に包みつつ背にうち被て端引結びつつ出てゆけば一角は窟門まで送り出つ又いふやう犬飼生久しからず奥院までうち上りて平山岩の断間より東のかた下に見えなれば路のほど近くて胎内竇に出るなり投返壁に立よりて角太郎を訪んとならば箇様々々に赴きなば又迷ふべき。ゆゑは側柏をしるべとすれば胎内竇より山路三四里の間は彼此に彼樹あり側柏はその枝のみな西へ指さしたれば。よく東西を辨ずべし。実に不測の奇遇なりと又遭ふよしはあるべしとも知らぬが。孤の小児の事を只顧憑するといふを現八慰めてその義は心安かるべし。冥府人間同じかるべし。とても別の悲しけれど赤岩ぬし。子息に髑髏を寄せんとて讖語を吟じて示されし小野小町が昔を数ひ給ふめくの歌に優りて世に未曾有の奇験あり。生る日に膽勇武備の億萬人に捷れしは死してゆくまで灵あらんや。ゆゑとありけん武夫の彼妖獣のために横死をとぐるを嗟惜むべしとのみいひて後方を見かへれば今までありつる一角が貌は消てうせにけり。

第六十一回　柴門を敲きて雛衣寃枉を訴ふ　故事を辨して禮儀薄命を告ぐ

却説犬飼現八はその暁がたに山を下りて胎内竇を出て赤岩一角武遠が灵魂の教しまくに銀山の麓を下りゆく一里の水澤を傍ひつつその路凡四五里なりの崎嶇を跰蹟して投返壁を投てゆく程に其日巳の比及に犬村角太郎禮儀が世を捨つ世に捨られて日影に疎き露路の身の縮ぶ名のみ花ある草の庵のほとりに来にけり。柴垣のあるところよりあなたを心當に裡面のさまを覗へば樸材の柱萱の檐二間の竹縁三尺の持佛棚これより奥は見えねども膝を容るに過ざるべし裏も外も新壁に蝸牛の涎を遺し掻も帚ねば庭の草葉に螽の声幽に

彼此の枝る冬樹いとの菴の冬時よりあるゆや流れ出る雑炊の昨夕の隨ふ
まぐ乾らび秋深けれども東籬の菊まく門陜しく丸株の柳さらぬ色
だゆも哀れるふこの菴の主るべ年紀い二十のうをを二ツ三ツゆやあんぎん色白く
唇絳ふ眉秀く居長高く月額の迹真黒ま延る髪ハ墨の髪結しく
髷む後ざゆ放くるハ彼白河の安珍ゆ似さらん欲身ゆ薄鼠色の袴の衣
只一領被て皂紀輪袈裟を掛くるハ葦洛を出く嵯峨野ま隱れ潜口の時
頼ゲ面影をめり片折戸のうをを正面まく端近う経机を推居るあるさ新
墨の圓坐を布設ゲ上ま結跏趺坐ゲ項ゆハ菩提樹の最ヨ角数珠を
うち掛くる合掌観念の眼を閉て餘念ゲ口ホ蒼松葉ゲ細枝ゲらま銜さるハ
是ゆん維摩ゆ似るべ机のうゆハ何の経文ゆや五六号可あり細小ゆる鐸
一隻と相馬製とらく青磁の香爐もありけり立升る香の煙の靡ゲもあんぎ

滅易紀を人の命ま出ひてべくかハ行ひ済を出あんこの人ハ見犬村氏礼儀ま
あるぎしく誰出めとゆとり領く現八を偲るくせりく敲く柴の戸のあるさホ
声をあり立く卒介るくあまうさん五吾倚ハ遠来の浪人ゆく犬飼現八信道
と呼るくれ犬村ゆまは要事あきあく用のくと呼門く幾遍とまく名告れども種
面ハ絶く応せぎ閉る眼をうち却きくあれをだゆもんぎりけり登時現八
出安く世と隱逸ま甘んぜく人と交を絶れんともかくまぐま音つ所ま耳る見人
如くるる今勤行の最中ゆて出ホ任せあるべ三ぶび草廬と顧ゆ志を致
されんこれま昭烈の才るくく臥龍を起ま信忘りハ心つ見る所為ホもあの勤
行の果る迄候ぎハ對面あるをかんと寸思をあるをぎ侭ま折戸のあるさま立在て
心ともく時と程せぎ亭午の日影近つ傾り浩処ま前面より年尚弱ま女房の
身のざるも賤しかるぬがたの容止の艶麗る磋言ハ野花の目ま美く村酒の人を

醉まる類ふ優くいふ〳〵の真間の手古奈もかくありけんと人いふ〳〵ゝめ鄙ふーく
鄙ふあるあ雛衣とまぐ名告ねど匂ふ香ふ恋み近つく先后ふ心あく露玉を
まぐる涙を隠せ袖頭巾袖ふ包めどもや五月の手ぐるぬ身ハかくとも軽ル草
履ふ跌くぐかゝ甲斐ゑル草の戸の虫の名ふ呼ぶ横笛が怨ふ似る抱ゑ誰ふ
羞て狩外視せる頭を低て来る程まあふ門戸る犬飼が立盡まとハ知らざりけり
現八遥ふこれをたく。毒心ふ猜まる宮ふあの女房ハあらふ似げるル容貌の醜くう
ぬまいく愁を含めるハ両を帯ゝる夕の花雲ふ銷さる月ふ似さり且その腹ハふぐゝ
まるハ有身て下り既ふまゆ四五箇月ふなまるあやゝとび昊豫て吹く犬村が離
別の妻彼雛衣と呼ゝるル其狩。あるゝまあるハ要ゝあるめ。飽ぬ別れ丸日と竊
びく良人ふ逢ん為ゝるがれを鬱悒くゝひやせん。さゝ憂ゝまあふ在りく中垣を
まゝんよりゝ。樹蔭ふ退ゝく障ゝまるゝあも惻隱の端ゝるべと遠ゝく一及

南ゝる枝ゝと敏ゝル女青の蔭を小指ふ躱ゝりこハまゝぐゝと雛衣の柴の
扉ゝ立よりゝく只潛然とうち泣ル幾遍と形く押拭ふ
涙を袖ふ斂ゝも。真白ふ細ル身を抗く敲くもちゝゝるゝ竹の籬笆ゝ立寄
女郎花ゝ花ゝぬのを吹ゝも浮世の秋のあル風ハ強顔人の心狭と怨言ハく呼
かけく喃ゝが所天角大ぬ。あゝかけるあるぐゝ逢ゝ濟ぬ胸の
火の昏さゝ滅ぬ恨思ひ弊敵も媒妁の宿ゝあるゝ何日まぐ。歎ルゝ〳〵く死ん
より切ゝく刃の捨言葉受て覚期を究めんとゝ思ル比ゝかゝるも無言の行ゝ
假托く応ざゝせぐ戸も閉ぐ心つゝ程をゝあゝけハ那方ゝひ〳〵ゝとゝハ盡ゝ
も聽れぐゝれをゝこの世の辞別犬村川ハ涸ゝゝも生く宿所へ還ゝと思ひ決めて
待ゝ〳〵やゝ興くゝぐル喃と刃の痩ル有ゝる胴の癰ゝ可敲けども口説ども
応せぬ良人ハゝる間も不言の行ゝ心を凝ゝを莫妄想形死灰ふ異ゝ形ゝ林ゝや。

八犬傳六輯卷五下
返璧の柴の戸は現八
雛上氏が怨言を竊聞き
現八
○神泉堂藏

八犬傳六輯卷五下
大村弟大郎
○神泉堂藏

膚撓まず目も瞑がず。庭の小草に集る虫の声の喞々と答けり。雛衣
怨に堪ざれば。苦しき声を吞り立て喃る所天目に見えずとも夢を宣ふとも是処より
其処へ遠からねば。声嗄るゝまで呼よしの聞えずやあるらんども今さら愚痴に似たれ
ども二人が中は古同安の井筒よりなる岸縁しは深かりけり。髪の初より親の結びし
妹脊川大和紀國いづれはあれど外に花見む月見の船の浮さる恋にあらざれば。
日暮て誘ふ阿曽沼の生の執隠れの紫鴛鴦も及びがと出し年を経て夏の日
子より小腹の病痾可ぬ薬も加持御符も又身の仇となる幸あるべしと思ひかけざれ
遺言に。この春爺々公の世を逝りたまひし忘の中なる山雞の峯上隔て妹と脊が
臥房を倶にせぬのみを。有身ぬるは密山夫の濫なるべしと継しき母御に濡衣を着せ
られても身には覚えぬと医師も決めて。寃枉神のこの身に實縁る一期の浮
沈宿の仇浪風騒ぐとも神を誓ひに瞻むに清きこゝろを君ぞしらめ。人は左も

いへ右もいへ跡も證據もなきことを情由も糾さず休書を理なく取らして親
品に預けて後安白は獨くらずも本意叛否いふでもあるまじきに。我身とつら
つら後父母兄弟養子妻せよと今さら忘れぬひし鉄宴の爺々公継
母御前の無理を並べし仰でもやらん思ひまれかもあれ。外伯父なり師なり恩童なる
養父の家を滅しても何とも思ひあらぬ切くなる二親達のけふ頃まで生し後
さば又せんすべもあるべきに欺詭て赤岩へ呼取られしより程もなく去られて帰る舊
里の家もなき舊の隨ならで他の宿一所に機を包さく津もつらぬ揖り舟風の便りに
言出て尼になりても共侶に住果よとはいひも甚ず。良人を茅栗のたぐくあるも
麻糸の有無の苔も中垣に隔る心の片折戸。固き鎖は誰が為ぞ。親の仰に術なく
なくあらで出せし妻ならば。その折にこそ難くもあらめ今はあん身も追出されてより憚の
関もなき遠山里の草の戸に秋の蛍と身をなさくあくがれてのそ来るものを對面せよとて

ありしぞバとて吭の咎いかならん。言の葉絶てくちなし（山梔子）の譯も知らせバ慰もせで壁生
草の何日までも憂に堪ねバ死ねかしと思ひ定めし篭居ハ舊来の氣質に似げ
もなく男子らしからぬわざなれど二世をかけたるおん身にまでも疑れ給ふ小腹の内をとへもせら
れも甘ぬ苦しさハ四月に六敷ある胡の國に生れぬ身とて甲斐なけれバかくまでいふぞもほえ
ずやハ不便と思ひぬらぎやおしあけそこえ開る心つよしと敲て推し入らまくもれど懸
鎖に女子のちからも届かで引放されぬ情縁のいとも切なる恨このかぎり。八月に痞を
壓へて倒れかゝりし樹牆に携著て、よよと泣く声細るまで衰果て地上に磤
と伏沈む。深き歎きの露霧の海に乾かぬ袖ハ芭蕉葉の露ともかへさくあはれさ。
且しく雛衣ハ涙を飲め身を起して裳引合し引揚て柳の腰に柳茶の副
帯楚と締直しても空に帰ましバ花もなき菴をうち見て嘸角太まゝゝくさめしく。
こそもかくてもこの世でハ添れぬハ前世で造りし罪の報ひ来てあかぬ別れに身を

殺を因果と思ひ諦めねバ恨ハ絶くあらぞかし。むかしよりしく腹黒く佞
佩る人の誣言に罪なき罪を得ぬるひし賢人もヨヌあれど終ハ雲霧を雨後の月
光ハ世々に顕れてあまそかりける時に優せ倒を引くに待ち称ど人の心に誠あり
くく命を捨る者ハ待る死しその後よりらバ胸を劈衣も披さもあらバかの疑
ひの解ぎやあらん。その折まで又舊の妻と思ふく朝夕に只一遍の唱名もあらん
身の回向を受給バ道徳智識の十念にも萬巻千寫の讀経にも優て
成佛あるべけれ。今より久しきあらぬ身の齢百歳の後を特て堂ろを蓮
華に坐ハ俟んのをゆるべとことろり告別声を涙に結隠る天さへ秋の雨催ひ。
捨られぬ世を捨る捨く死天の旅路へいそがんと思ひ訣めかへりゆくそそや妻の
後影ハ菴の中より見えとも声ハ定に挾牡鹿の夢野もかくや角太郎妻
子珍宝及王位臨命終時不隨者と悟果ても活る身の人木石ならざれバ。

方寸の海ふ浪立く心耳ふ風ハ吹ども合掌の巻揺動なそ口ふ銜ー松の葉も颯々として靡くふ如く断腸の氣色顕れを忽地ひゝへけん寂寞とゝーく音もせざるも行ひ清ーけりる程ふ現八を女青の樹蔭より今雛衣ぶ角太郎ふ怨ずくのひたる顛末を送る竊ゆりければ悲愁嗟嘆ふ堪ぢれども忍れて其の名を豫ても知れそ。その良人ふもそうまぐ遭いそ慰むべくもゆゝぢれそ。傍痛くもその文せんとぞもるを拒ゆゝ既ゆて雛衣ぶ死を訣めるる氣色言葉に且敬焉を且憐を背ゆり竊ふ跟て出を。倘渊川へ身を投るゆーもゆゝば禁んと思ハば樹蔭を立出く遺過ーく足早ふ走り著んとする程ふ遥ふ聞ゆる遠寺れ鐘い亭午ふるりぬと角太郎。稍解行の眼を刮るく。松葉より捨経机と撫遣りく衝と身を起を外面ふ現八ぶ雛衣を追んとそ心いそく幾ふ欲ゆるまく考る後影を遥ふ仰るて声高ふ犬飼生等ふ菴主只今解約せり誘ふるるとと呼留ぶ現八佐とえくりく今ゆーふ不吉ともひ難つ心ふ思を先后ふ躊躇ふるゆ引久を其の間ふ角太郎ハ路次金剛寺て折戸口懸鎖外ーく出迎ぶ現八を引て隨ふ且竹縁のほとりを。行袱を解卸ー草鞋踏反も脱捨く躊躇を角太郎ハ客座ふ請ゆく茶を羞め貌を斂めく態懇ふ郷ゆハ思ひけもるく。来訪のよを知るとゝども戒行の最中を迎接ふ逞るるーー失敬を許ーを某則當國の人氏物の数ゆひるとも大村角太郎禮儀と呼るるれを既ふ貴客の高姓ハ屋名生られをの て某知せり扨も何ふの所要ありく遠く貴臨せられやゝ某命運拙れば頻りふ道世の情願り恩愛の絆を脱離ーく雅俗の交遊を絶ゆ久ゆゝ貌を更ざれども。おろハ卑邪氏の城ふ入く維摩の室ふ坐せんと欲を貴客必高論あべー明教よりく迷ひを暗ふ照ふ甚ーゆゝ且寛ゆを相譚のとゝ人ぶ又現八ゆ神ふ祝合せを膝ゆく。

某は凡骨俗腸上總に生れて下總に成長り。近曾京師に旅宿をしたれど。
こゝに武藝を専とせく一丁の字義をも知らぬ只異姓の兄弟五人あり。渠ホハ
文学に長さるあり武藝男力の捉れるあり皆某が及ぶ所にあらず。ちなども因果
同感の過世あるとして棄てられぬ素より迭に厚処に骨肉あも優に睦まず苦楽を
共にせんと拉言へり。かゝる不測の厄難あるく相別れてより往方をあらぬ某只顧索
巡るホ。あくまでの三年を歴たりゆくて今茲京師を出て陸奥を志す。稍當國
なでまの程。ここの細草の茶店を貴所の孝友文学武藝并に養實両大人の
学術武勇の支の趣を伝ゆて景草ホ堪ぬらぬ閑居の屋を敲て教を受ん
とおもひつ。勤行中とも知らぬ早やを頻りに呼門をさゝ応礼と出られけ。さられ
疎忽を海容せられて呼出られハ一期の幸ひ望足りぬと互ホ応答言詞まで。
角太郎ハ且歓び且羨て頭を拊其過庭の訓を稟て和漢の学を好めども。

不肖ゆく成るとうまれ今釋教に流れて道人よるんとれるの己をえぐるの
所幼のこ胎を稟ゆく男子と生れ武士ならば阿容くくと法師ホるりて可ぬるん中
この義を推しく某が薄命を察しゆ初見参ホハるれども前路を急ぎ去ぬ。
先ぬ胸臆を畫ぬ夫千金ハ易得易く断金の友ハ甚得難しされどく蓋を
傾けて故が如く白頭までも猶新なりとハ孔聖子華子の交を例に援く況られ
るねども。その志同しく学ぶ所の異わるぬハ初見参も故人の如く合壁比隣ホ
年を歴るとも。その志異わくその方の同じゆくハ頭ホ霜を戴くまで初見参ホ等
かるべかくのべ何とかゝ容ホ傲るホ似れども某既ホ貴客をとり益友と思ふ。
昨夜の夢ホ何処とかるくいと大なるの大の毛黒白雑毛るぬその数まぬ七頭
ありぬ中ホ隠れてなぬぬもり或ハ間遠くしく致しゆ況もヨヌクリを某深く
あるく愛しと賞を鳴うと呼ぶ程に一隻の巨犬走り来り某を撥抱くとうぶ

身も亦忽地に大なるりぬと思ひて、愕然として覚るに彼荘周が蝴蝶の夢に
似て非るを知れり。占まるこもせざりしが今又夢が虚夢なるか貴客か大飼氏か
為に某が亦養家と嗣て犬村氏を冒し、且貴客の言を聞くに異姓の兄弟
五六人ありとも聞れ、ふいなく因縁あるふ似て願ふ件の人々の姓名我知らま
ほしー厭ーめ、まことに亦さるべきとふ現八感じて已むこと寔に一大奇夢なり某が義
兄弟ホい犬塚信乃戌孝犬川荘助義任犬山道節忠與犬田小文吾悌順
犬江親兵衛仁某と共に六名との餘るに二人あるべしいまだ遇ふことを得ざるのみと
告るに敬焉く角太郎い頻りに腦の進むを覚ぼ原来皆是犬をもて氏とせる
ふ不思議さよ、ちなみに至くなるに夢の夢なるかと感悟せり。ゆるそも六犬士の義
兄弟とあるは因縁い亦ふ不ふ然やと問へば現八含笑くその義を告るに難くも
あらねど外に憚るよりいれば只今い時尚早なり。なほ主人い感得の瑞玉とおもふ
おもふその玉ゆいかのごとく礼の字の顕れて定るるかるるぞやと問久されく又驚く
角太郎い眼を睜りて、こを知られけん其寶とする瑞玉と年来秘蔵
ふりしかとのみ亦嘆息して件の玉のかの就て又一奇談をぞ語るに某が寶
母い諱を正香と呼まりその性怜悧ゆへに且神佛を信ずるに大なるの婦女
子に過ぎりかくて某を産まる比加賀なる白山權現の社頭の粒石を乞ひ
その児の護身壇裏に納置とそい痘瘡も麻疹も究めて輕しとある人のいふを
聞て北國へゆく商旅に云云と憑ひ乞て件の粒石を取よせ、その人のもと来
つるとそれが石ゆいかにそれ玉ゆいかの玉いとのひとつも項に付くる珠數を捨りて大約此
大小ゆへ礼の字さに顕れるとのもとに人も知ぬに初て驚くかりそれが母い殊
さら尊信してもぶ伝に某が護身壇裏に納りとぞいて某三才の時脾疳ふ
よりて危りしふ鍼灸薬餌も験なく療類なの術竭くるに折ふ母竊に心

師と仰ぐ件の玉を水に浸しその水を飲ませ慈母の深信によりて瑞玉の奇
特やあらん顕はるゝ一トしほ二トしほ肉を増しそびえて本腹
なりこの一條は某が稍東西を知るころ養父母の云云と説示され傳聞
なれどもその後某が身に恙あるとき且其を用ひずして件の玉の奇験を特ある即
功あるべきとおもふれば近屬養父母の病中ある玉を浸せ靈水をすゝめ勧
めるとの某が病痾にのゝ奇験即功あるにも親に験あるべしゆゑ又命
数に限りあるゆゑなる奇特いるべのうち病苦の早に退くより入るゆゑ今茲夏の
初より某が妻と共に赤岩なる親異母弟と同居して在りし一日五妻雛衣
腹痛猛に苦しく百薬験しめずれば某せんすべなきまゝに彼玉を浸して水を飲
ませとゝ折柴母が先その玉をうけとそ雛衣がのゝる茶碗を搖取らんとせし
程に雛衣慌忙そ衍怨水のゝ共に件の玉を飲てけりこれ何とせんとおもふ後
悔しる雛衣ゝ尾某が周章遑恨ゝ辟言ふ物もうれを然とも吐きぐもめば
浄めに赴く度毎に心をつけとと誨に腹痛ハも瘥れども次の日ハ次の日も赤
次の日も尿屎と共に玉の下るるのうければ忍び捨て始てび問ぜやく五月の比より
雛衣ハ経水ぞえ腹ハ漸々にぬぐみそ有身るのれに似ちこれより醫師まねく
その病症をいかと問ます口の脈草に増しく指頭の動脈顕れまべ全く懐胎なん
といふりとふ恥しとこるぞ某ハ三年以来養父母の病中より妻と枕を並べしのゝ
況くこの春の末より養父の忌中にいりゆしと夫婦臥房を俱にまぐれ然るとき雛衣が
懐胎いろいろ沸るとこゝ言葉に枝いぞ来ぞけるが密夫の亂るんに阿容々々と
ぞ産まるゝとふのあればうちも置れぬとて不便ゆゑ雛衣を離別して媒妁
許預け置ぬうちに某が壻養子ゆゑ雛衣ハ廼養父母の女児と且赤
岩へ同居の折犬村なる宅ハ人に住しつ奴婢ゆゑ暇を取らしつ袷とのひ恰とのひとゝ

些の怨みとも去るべき妻ゆゑも素よりその性貞順老外心のあるべき某それを知るとなく離別とゆせん舊の居宅を住せん為明々地ゆいひくるべき情由さ
あるよりとかくるゆ某命薄く幼ろよりしく愛と父を失ひつ年歴て親を呼久
されしその恋ひの空とりて亦復同居を許されぞこの身い路頭を呻吟ふとも犬村
る田園い雛衣が一生涯を送らん料まべるをそれもら親の返されば義理の
妻と世を逝ぐ養父へいひ解く辭もゆべせんくわさゆ世を捨て法師ゆるべ吾
妹子が怨ゆ散れんが親の思ひ久さをゆゆやせんと果敢るゆ神ゆ佛ゆ願
言をとげ盡ゆ日毎の戒行初對面より慙悔話説い恥を知るゆれゆ似れ
ど鄉ゆ雛衣が本くらひることを貴客いゆせゆひけん命が又今ゆゆ隱ゆんとて
ともその甲斐ゆ他人ゆ思ことをも生るい則良友をゆる歡びのゆゆりまそ
烏許んと思られるが教ゆへと他事もゆく耳に示も心の誠を現いゆゆく毎ゆ憂

苦さをと慰めゆて感嘆の外ゆりしゆ頭を擡てゆゆゆ孫増を
貴所の孝友天感空ゆくゆりせい夫婦の再會期ゆく俟べ然ゆを早
ゆく只管ゆ法師ゆるんと思ひゆゆい亦乞千慮の一失ゆべ実ゆ推量
せゆゆ如く鄉ゆ賢室雛衣とのゆられゆい洩ゆつ且その氣色をゆゆ
逼ゆく漏もゆゆゆ死を樂むゆ姉人の情を萬一のゆゆゆ後悔その
甲斐ゆ思べと思ひゆけれい後を跟く届ゆゆを両三歩走ゆ去ゆんとし
ゆる折忽地主人ゆ呼留られてその義を果さぞゆりゆ人ゆも婦人ゆ不
義ゆ死を知りてその死を拯んと思ゆ心のつぶやいい主人ゆ似げ見所ゆゆゆ
やと詰れば芒乎と微笑てその疑ひい理りゆれども終雛衣ゆゆ底意を
知らで死んと欲ゆるとも瑞玉今身腹ゆ在べ水ゆ入るとも溺ゆべらぬ火ゆ
入るとも焼ゆべらぬ憶ゆ渠が腹の病病い彼瑞玉の所以ゆく懐胎ゆを

あらがふべし。然るを死せんといふに怕れて慌惑ひて對面せず妻あれ信ありといふとも。親の為に後るゝ不孝の罪を脱れがたしと思ひにければ禁ざりしといふに現八有理と暁りて又いふよしもあらざりけり。且して角太郎は窓の日影をうちかへりみて今はや未に近かるべし。要なきヿヲ辯に時を移しつ。さぞな饑はしうもあらめ。けふはとく/\今朝は炊もせず。嚮に犬村なる里人が贈来しゝ團子あり。僕に飢を凌ぐべし。いざ/\といひつゝ棚より卸せる食籠の蓋掻取りつ箸を添へ。そが侭現八に羞むる。地坑に麁朶を折焼て山茶を煮つゝ共侶に箸さし入れつゝ食ふ。現隔なき容あれど清たるは水源下流魚と水とに異ならぬ歟待態を頼しつ。團子も既に盡るころ。沸立山茶を角太郎は茶碗ぬさゝへに汲とりて。いざとく齊一飲む程に又現八に對ひていふやう。ゆゑある友に訪れながら同好の義を述もせで只憂しき自家的話をさせる鬱悒くおもはれけめ。犬飼ぬしは何人を師として武藝を學び給ひし。生れ得たるその師に勝る豪傑も世に多かるにあらねど。その儔にもあらずかといはれて現八はいとも呵々とうち笑ひて。某が師は二階松山城介なりけれども。身の不器用なればにや太刀ぬく事を覚しのみ。武の一藝だにもかくの如し。況て文武を極んといふとも難き所行なるべし。よに恥かしき言ながら某をも稚き時より太平記を大く好みて熟讀しつれども。得解がたき所ぞあり。そが中に三人張の弓に十三束三伏笛かけしの上まで引かけ。暫く堅めて丁と放つなどいふ事を。巻の七の三丁その他にも処々にみえたり。この三人張といふよしを師にも問ひ。又近曾京師に旅宿せし折に古実者に問ひしかど。その答定かならず。或るはある人の説に云。世に三人張の弓といふは強弓の事にあらず。弓は總て三人して張るもの也。弦かけ一人。張手一人。おさへ手一人。貴人の弓なれど一人して張るは大きなる無禮とせり。○武家故事要言といふ書に記されたり。然どこの説も亦さてあるべし。弓は必ず三人して張るものならば。三人張とはいはずともあるべし。

況て五人張といふ弓もあるべきや。且軍記に誌す所い強弓の武者にあり。貴人の弓とのいふよりも主人は二代の学者なり。且武藝も長ずべし。これらの事は考へ合ん件の説いふかやと問へば角太郎うちなづき二階松先生の武藝いかゞ父もよく知りたるべく嘆賞せるあり。彼先生もち考の定るかゝるを某ごとき考へるかゝるを殺三人ばかり張るといふ臆説い貴評の如く論ずべき足らぬ。按ずるに軍記に三人張五人張の弓といふ。猶唐山にて三石の弓五石の弓といふ。その力と量らん為に弓の真中に索をつけ。これを深くとり吊りて。その本末に米苞を掛てはかる。強弓にあらざれば重きをよく勝るとあり。この義を彼の書に記せり。書言故事に不学類の條にあり。これを夢溪筆談に辨證の篇に載せり。所と詳と也べし。その書に沈存中が云。摘要弓と弩を挽蹶に古人鈞石を以これを率ね今人は乃粳米一斛の重を以一石とす。凡石者九十二斤半を以法とす。乃漢秤三百四十一

斤也。今之武卒の弩を蹶に九石に及ぶ者あり。其力を計るに乃古之十五石ばかり。魏之武卒に比べ二人で三人有餘に當れり。又三石の弓を挽者有り。乃古之三十四鈞なり。顔高之弓に比べ二人で五人有餘に當るといふ。又按ずるに石い重百二十斤と國語の注にあり。これ漢の秤の分量なり。後人一斛を以て一石とのいふ。漢の時より如此なり。漢の百九斤い宋の秤にて二十二斤に當り。漢の一斛い宋の二斗七升なるより。沈存中のいふ荀子に十二石の弓のあるなり。又齊宣王好く三石の弓を射。これを九石とす。その実は三石の弓を九石あわせ張るなり。説苑の雍塞編并に續博物志にも見えたり。かれが唐山にて弓に三石とのるをいふ邦にて二人張といふべきなるべし。一斛宋の二斗七升の米の重さなり。一人力と云。二人力い三石にこれに由てなり。三人張といふ弓い三石の米を掛る強弓なるべし。疑ひなし。又十三束三伏といふ。その箭の長大なるといふ。凡一束を五寸とす。今の五尺なり。

まことにその実は三寸ゝ所云十三束とは六尺五寸の征箭ゆゑ実を三尺九寸するべし又三伏は三節也。伏は假字にその箭竹の節延く。僅に三節あるをいふ凡武器の長短を幾束といふは是天朝の古実にて十束の御剣はその長十握あるを知るべしなり。近世兵学者流の書ゐ取るに足らぬ臆説ヨリ由断のそうなるふたとうち合笑て答れば現ハふく感服して昔の人もかくこそひけ君と二夜の抱くらひは十年の学に勝る教諭よりて年来の疑念立地に氷解せり。序に学問せまほしきは又剣の巻に源氏重代の大刀。あるとは吼るとは蛇の鳴如し。よりてその大刀の名を吼丸とつけられ。その上は人食知るり刀剣も亦声あるべくよく吼るとこれありやと問に角太郎又答て刀剣も亦吼るとあり。酉陽雑俎巻六境異篇に鄭雲少卿時一剣を得り鱗鈇星鐔時有て吼也常に荘居に在り晴るる日あゝ膝を藉くこれを玩ぶに忽地一人有ト云云とは

又後燕慕容垂の元年。晉の太元七年小雄剣の鳴るを所見ありと説示せば現ハ四海ひく盛衰記巳下の軍書ゐ大逆謀叛の徒と朝文高ゝ誌ゝ子ゝあり義ハ穏るゝにやとゝ問ば角太郎領ぜ。ゝよく心つけ凡国家の臣民たるべし大逆の罪あるとは是則四賊ゝ唐山の史傳ゐこれらを賊と書ゝり然るに朝敵とゝく可るゝ平。敵ハ字書に音狄俗字ゝ敵赦ハ小児の喜びく笑ハ貌と注ゝり又彼国の俗語ゐ敵手とゝ此土ゐく相るとゝ甲乙を手ゐ敵とゝ迭にこれを敵とゝ大逆の罪人と朝敵とゝ朝廷の敵るとゝ同ト。記者の文盲笑べし憶ふに清盛頼朝より尊氏将軍に至るまゝく朝家を蔑ゝ自家を営ゝ兵権を擅にして宇内を制ゝ順逆の理に暗ゝ唱初るゐゆゝ記者の當時に媚て他世ゝ俗稱るゝ。とゝに現ハ欽びく某もさを思ひゝ又戦陣に夜討とは進退の

笛を呼子と唱へ國の大事を報る使と。早打といふのハ近世世よりの俗言なり。
それを漢文ニ写さんハ何とか書て當んや。と問ふ角太郎沈吟しく呼子の笛ハ
叫子と書べし又早拍ハ羽檄ハ急脚遞と書てそなへれ并ハ宋の流存
中ガ筆談十一ノ巻官政權智の両編をそめくらしと答ふ現八うなづく感
じくあるよ一條鳴呼ガ如ハ問事のいろり近世世の淨瑠璃本及歌儛伎狂
言ハ親子迭ニ認らぜしくその疑ひを決さるとその子の腕を劈く親の血と合
しるるハ実の親子ハ鮮血滲ず親子ならねばその血ハ凝ず或ハその親の死後ハ
至りて白骨髑髏ハ血を瀝るもその驗のなきハ婦幼もとより知るさを
けれどもこのるれ本つ所定かならぬ何ホの書より出るあや素より不経の俗説
なり。欲主人の考ましまはしと問ふ角太郎うち咲てこの義も亦管見あり梁書五十の
列傳豫章王綜ガ傳ニ綜ガ母吳淑媛ハ初齊の東昏の宮中ニ在りし

時より梁の高祖ニ幸ひせられて七月ゆして綜を産あれたまをりて宮中ニそヨく
疑ふのありけりその後淑媛ハ寵衰へくいく高祖を怨しハ竊ニその子綜ハ
生れ出ん兄ハ東昏君の送腹なるうんとのひしを綜ハ半信半疑して共ニ高祖を
怨こころ潛ひく曲阿ニ赴くく齊の明帝の陵を拜さるとせしかども急東昏の亂
るるを定かニ知るうるるしニ當初の俗説ニ生者の血を以死者の骨ニ瀝はゞ
滲れば父子なりといふめるをうち咲く綜ハ竊ハ東昏の墓を発死骨を出し已ガ
臂の血を以瀝ぎくこれを試ニ又一男を殺しその血を瀝ぎく試ニけるニ并ニ驗
ありしハ昔ニより常ニ異志を懷ぎく後四年ハしく謀叛をと五十五巻の初
丁ニ見えたり又唐書九十五の孝友列傳ニ王少玄ガ傳ニ云王少玄ハ博州ノ人
聊城の人なりけりその父ハ隋の世の末ニ乱軍の中ニ殺されしり少玄甫十歳の
時父の所在を母ニ問ハ母云云と答しハ哀泣く彼此とその尸を求る野中に

現八
為朝

大村の妖怪の話を聞く

白骨ヨヌくあり時ふる人教くいはく母子の血を以骨ふ漬て滲るれば父の骨ぞ。
といふ少玄悅びく野中の白骨をとる毎ふ虐を錬く血を瀝ぐ已凡一旬
あるりふ遂ふ父の骨を得く。骨ひのまくふ茅生けりかくてその劍の甚しきー
かど。一ぢを餘ゆく癒くけり時ふ唐の太宗の貞觀年中州よりその状を言
上せーるぶ安ぐく徐王府の參軍とりふ官人ふるさまてーよ合本の四十一の十二丁の
右ふてえり。かれがこのヨ唐山の俗説ふ出るとりくども梁唐の時このヨあり且
當時の史官歴ふとしてその経験を書せーるぶ浮ふる言ふあらぶるるり是ふ
秘藏の説るほをあらぐいんハ惜られども貴客の為ふ譚るのことを問ヨ毎ふ
古書を引く證文疑ふべくもあらる為ハ現ハ頻りふ感嘆ーく応仁以来京
師ふまり和漢の書籍亡失せく四書ぞふ全きをもてるりの稀るりされば
学問ハ地を拂ふく五山の僧徒るンどの外ふ漢籍を讀むのもるるふ士人ハ

船虫がこの地ふ遁れ来て一角ヲ安とるりー未歴ハ第七輯小至りて具ふ見へ

今尚青年ふく博学宏才かくの如しいと憑ーくふと悦びを述くコざり
ーと角太郎ハ皆ふ貴客の賞美い分ふ過くりヨヌ言ハ徳の害ふりと
王通もひふりのを世の博物ふ皆ふるべ傷痛ーと笑ふ他聞ハ用捨ふれ
かーと互ふ讓る辞義口誼笑埒の會ふ餘念ふく時移るまで相譚ふ折
うう外面ふ居ヌ女粧裝轎ふ杠卸せば先ふ建る轎子の戸を開せく出るの是則別人るぞ赤岩一角
武遠が賤配の妻船虫ふ揚箔しる衣の下ふ白小袖をうち襲ぢく金
襴の帶四下ふ光輝ふ練の帽子の白妙ふ扇翳ーく立あり呼ハせと鷹
揚ふ腮推向くふ示せば一箇の後者ぞあるふ折戸を頻りふ敲ぢけ
畢竟船虫ふ来て又甚麻ふる話説るふ第七輯ふ解分るを知ん。

里見八犬傳第六輯巻之五下 終

〇著作堂手稿南總里見八犬傳第六輯書畫剞劂人目次

自巻之一至巻之四之半但箇端分筆 柳川重信

自巻四末至巻五上下并箇端合筆 溪齋英泉

畫工

淨書

巻一二五之下 谷金川

巻三四五并序文 田中正造

剞劂 全巻繡像 朝倉伊八郎

家傳神女湯 一包百銅

産前産後すべてちのみちに即功あり并に婦人の諸病つかえめぐりおーく或は腹痛めまひ氣うつ疝ホによむし

精製奇應丸 大包代弐朱 中包代一匁五分 小包代五分 また賣ふ

薬種をえらみ製方家傳のかげんをもつてこのむるにその功百たびあらわるゝひびきの如く妙なり

熊膽黑丸子 一包代五分

君薬にはくまのいをもつ薬物をえらみ丸となしすぐれてよしへるゝ熊胆けを用せるもきなくてその功神のごとし

婦人血わくのむ妙薬 一包代六十四銅 半包三拾弐銅

右の製薬すべて利のためのこくわずかつくみ近年薬種ゆる直とかへとも猶妙物をえらみてその功をうしなはぬ

本家製藥 江戸八神田明神下同朋町東横町 瀧澤氏製

賣弘所 同家元飯田町中坂下南側四方の向 幸ノ戸澤氏

〇取次所 江戸芝神明前三丁目 いろはや市左衞門 大阪心齋橋筋 河内屋太助

六編六巻三冊 六

极の
諸善院

八犬伝

第九編

枕地

陽春